

資 料

北京オリンピック情報支援プロジェクトにおける スポーツ情報マスメディア研究所の活動

二戸部 優、栗木 一博、岩瀬 裕子、藤本 晋也、本間孝太郎、
八重樫 瞳、勝田 隆

The activity of Institute of Sport Intelligence and Massmedia of Beijing Olympic games intelligence support project

Yu Nitobe, Kazuhiro Awaki, Yuko Iwase, Shinya Fujimoto, Kotaro Honma, Takashi Katsuta

Institute of sport Intelligence and Massmedia at Sendai university (hereinafter referred to us "ISIM") took part in intelligence support project of Beijing Olympic games that grounded on a cooperation agreement on study of sports intelligence both Japan institute of sports Science-Sendai university. The purpose of this report is to look back on this project focused on ISIM's activities, and to cleared the issues about this activities.

Key words: information, intelligence, rearing, organization, skill up

I. はじめに

今夏4年に一度のスポーツの祭典であるオリンピックが北京において開催された。選手達がメダル獲得を目指し激戦を繰り広げる中、この期に各メディアを通して表層化する世界各国の競技力向上に向けた方策等を収集し、今後の日本の競技力向上の課題を探る北京オリンピック情報支援プロジェクト（以下、東京Jプロジェクト）が結成され活動も行われていた。

本稿では、「東京Jプロジェクト」のサポートとして参加した「仙台ブランチ（東京Jプロジェクトにおける仙台大学スポーツ情報マスメディア研究所の作業チームの総称）」の活動を振り返り、総括すると共に、今後も国際大会開催時に行われるであろう「仙台ブランチ」のサポート活動に対する課題を抽出することとした。

スポーツ情報マスメディア研究所の役割

仙台大学と国立スポーツ科学センター（以下、JISS）は、2007年10月に「スポーツ情報研究に対する連携協力に関する協定」を結んだ（表1）。この協定は「スポーツ情報戦略に関わる共同研究やインターンシップの実施等の業務提携・人的交流を通じ、わが国のスポーツ情報分野の発展と次世代に向けた人材育成を図る」ことを目的としている。この連携を基に仙台大学は2008年3月、学外のスポーツ団体や組織と相互の資源や機能を繋げることを目的として、「スポーツ情報マスメディア研究所（以下、ISIM）」を設立した。ISIMの設立についてJISS情報研究部の和久¹⁾は、仙台大学とJISSの内部環境分析を行い（表2）、両者が相互補完的な関係にあることを明らかにした上で、「スポーツ情報戦略に携わる人材育成と研究・教育充実の場の創出が、我が国のスポーツ情報戦略分野の研究の発展のカギ」となることを指摘し

ている。和久によれば、この協定は「人材交流による研究・教育の充実、研究・教育協力、業務分担による効率的ビジネス展開、及びこれらを通じた実践教育の機会創出等」が期待されるものの、「戦略遂行のための人事体制や業務体制の整備、研究課題の価値、さらには地域貢献・

社会貢献の面では課題がのこる」という。従って和久は、協定を基軸に設立された ISIM が「仙台大学と政策執行機関としての JISS のあいだのクッション材となるハブ拠点」として機能することにより、「課題」を解決していくことが期待できると論じている。

以上のように、協定の大きな目的の一つはスポーツ情報戦略分野の専門性を身につけた「人材育成を図る」ことであり、そのために外部の団体・組織との接点を持ち、「人材育成」に寄与する役割を果たすのが ISIM である。ISIM は具体的な人材育成の場として、2007 年度に設立された仙台大学スポーツ情報マスメディア学科（以下、SIM）と密接な関係が構築されており、仙台大学内において学部や大学院と並列した組織として位置づけられている。SIM は「高度で内容が濃いスポーツ現場での実習や学び続ける意欲を喚起するために、現場の活動視察や専門家から直接指導を受けるカリキュラム」を展開することを掲げている。SIM に所属する学生は、スポーツに関する「現場」での実習やサポート活動が多くあることから、ISIM が提供する「学生特別教育支援」事業などに参加し、これまでにビデオカメラやパソコン等情報機器の操作方法に関する講習やマナー講習を受講しており、自身のスキルアップに努めている。

本稿で取り上げる東京 J プロジェクトにお

研究分野	スポーツ情報戦略研究に関する共同研究の実施, および研究の受委託に関する連携
教育分野	JISS におけるスポーツ情報マスメディア学科のインターシップの受け入れ, JISS の会議・研修会への学生の参加, 仙台大学学科授業への JISS 研究員の派遣等, 教育分野に関する連携
情報業務	JISS がこれまでに行ってきた情報コンテンツの収集・分析等の業務への協力, および仙台大学が保有するトップレベルの競技者・指導者等の情報の提供等業務に関する連携
人的交流	教員・非常勤講師の人的交流や, 両機関における相互の内地留学の実施等, 人的交流に関する連携
人材教育	両機関におけるスポーツ情報にかかわる人材育成の実施

表 1. JISS と仙台大学の連携協定の内容 (勝田隆 (2008) 仙台大学と JISS の連携, 体育の科学 .58 (8) .杏林書院 .p575)

	仙台大学	JISS
強み	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ情報マスメディア学科 ・次世代, 次々世代の人材 ・教員 ・教育プログラム ・研究活動 ・組織の柔軟性 	<ul style="list-style-type: none"> ・国立の機関としての位置付け ・情報戦略事業 (ビジネス) ・国内外の情報コンテンツ ・地域, 体育系大学, JOC, 競技団体, 学会, 世界等とのネットワーク ・行政的裏付け (プロフェッショナル/職業)
弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・国際スポーツ社会との関係 ・国際的視点からの戦略 ・ビジネス機会の範囲と頻度 ・実践教育の場と機会 	<ul style="list-style-type: none"> ・タイトなマンパワー ・キャリアパスの保障 ・スタッフの時限性 ・人材教育の機会

表 2. 仙台大学と JISS の内部環境 (勝田隆 (2008) 仙台大学と JISS の連携, 体育の科学 .58 (8) .杏林書院 .p577)

る「仙台ランチ」の活動は、オリンピックというまさに世界最高峰のスポーツ「現場」が「教材」であり、非常に大きな教育効果が期待されるものであるといえる。

東京Jプロジェクトの概要

東京Jプロジェクトは、先述したように海外諸国の「国際競技力の向上」に向けた取り組みに関する情報や選手団の構成に関する情報を収集し、今後日本が国際競技力を向上させる上でどのような取り組みが必要であるかを明らかにすることを目的としている。このプロジェクトは、2002年に行われた「第14回プサン・冬季アジア大会」に発足し、国際大会が開催される毎に全国からサポートメンバーが集結し、大会期間中に生まれる情報を収集していた。しかし今年度から文部科学省委託事業として、日本スポーツ振興センターは、日本オリンピック委員会、中央競技団体及び文部科学省との綿密な連携のもとで「チーム『ニッポン』マルチ・サポー

ト事業（以下、マルチ・サポート）」を開始し、東京Jプロジェクトに参加することとなった²⁾。この事業は「2012年のロンドンオリンピック競技大会において、日本が世界の競合国に競り勝ち、より確実にメダル獲得することを目指し」ており、「メダルを獲得するための独自のシステムの構築」、「メダル獲得のための包括的戦略に基づいた、一貫性のある支援プログラムの立案」、「多方面からの高度な情報・医・科学支援の実施」などを行うとしている。さらに、先述した仙台大学とJISSの協定により、仙台大学からのサポートも加わったため、東京Jプロジェクトはこれまでのように、「単独」の組織ではなく、ナショナルトレーニングセンターに「東京Jプロジェクト本部」を設置し、「マルチ・サポート」や「仙台ランチ」と共に「複数の組織の集合体」として、活動を展開することとなった（図1）。

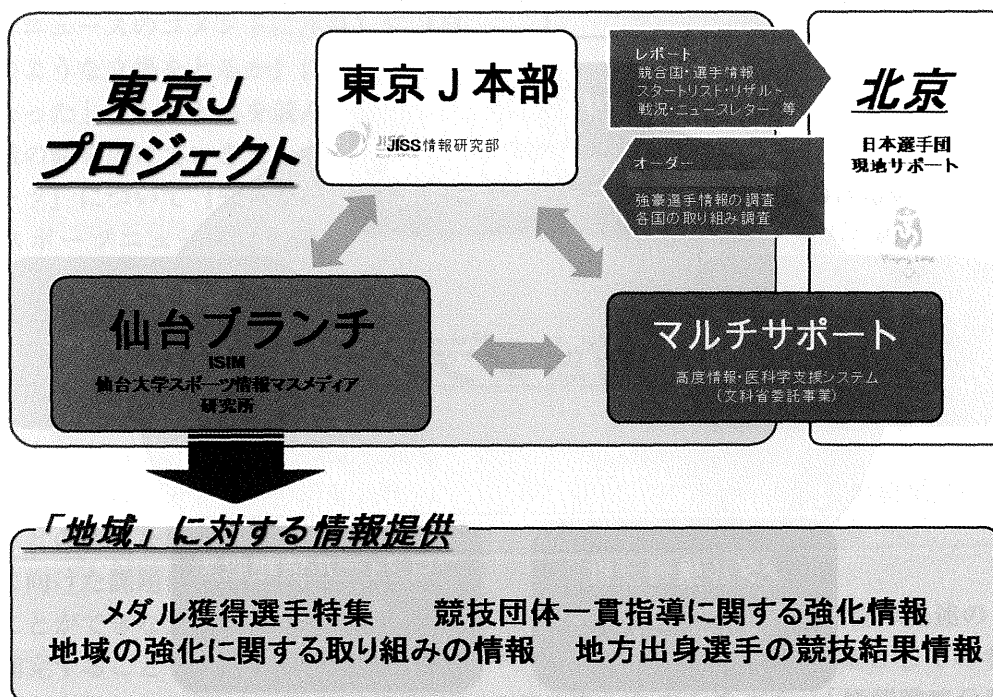


図1. 東京Jプロジェクト組織体制

仙台ランチの役割

東京Jプロジェクトの活動は、北京オリンピック開始2日前の8月6日から24日の閉会式までの18日間行われた。「各国の競技力向上に向けた『国家戦略』に関わる情報」、「競技力向上にむけた用具・用品の開発状況に関する情報」、「オリンピック競技結果に関する情報」、「スタッフの構成人数を含めた各国選手団に関する情報」の収集など、非常に幅広い分野の情報を対象として作業が展開された。これらの作業の中で、「仙台ランチ」は、SIMの学生計27名が参加（内11名がデータ分析・活用演習Iの授業として参加）し、主に「選手団」に関する情報や、「競技結果」に関する情報を収集した。「メダル獲得分析チーム」、「プロフィール情報収集チーム」、「リザルト（結果）情報収集チーム」を結成し、「各国の選手団は総勢何名で構成されているか」、「競技結果を収集し、各国のメダル獲得数の傾向はどのようになっていくか」、あるいは「他国の選手のバックグラウンド（プロフィール）に関わる情報は公表されていないか」といった言わば「オープンソー

ス」としてホームページ上に公開されている情報を集約し、東京Jプロジェクト本部に提供することが主な役割であった。さらに「仙台ランチ」は、東京Jプロジェクトやマルチ・サポート事業との関わりの他に、もう一つの「接点」が存在した。それは「オリジナルプロジェクトチーム」と「地域情報収集チーム」を結成し、「地域」というステークホルダーに「接点」を持ち、活動を展開したことである（図2）。当然のことながら、国際舞台で活躍することができる選手を育てるには「地域」の豊かなスポーツ環境が存在することが欠かせない。しかし地域のスポーツ関係者にとって国内の競技力向上に関する情報、あるいは国際的な競技力向上に関する情報は、非常に得難い情報であることは想像に難くない。従って「仙台ランチ」は、東京Jプロジェクト本部、「マルチ・サポート」との協力関係により、豊富な競技力向上に関する情報を有しているというメリットを活かし、これまで情報交換を行ってきた地域のスポーツ関係者を対象にした約200名のメーリングリスト（SIN News : Sports Intelligence Network

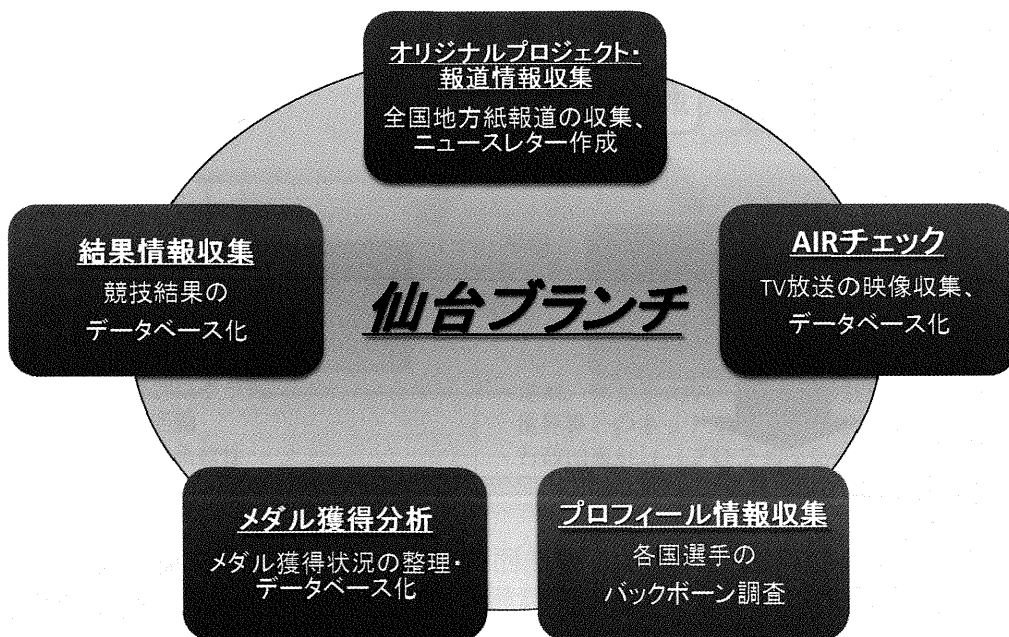


図2. 「仙台ランチ」の組織体制

News) を利用して、オリンピック期間中毎日ニュースレターを配信した。このニュースレターは学生が、様々な資料を調べ編集したものであり、ある地域の関係者からは「非常に興味深い内容で、楽しく読ませていただきました」と感謝の言葉を頂くことができた。

実施時期：平成 20 年 10 月 26 日～28 日
対 象：「仙台ランチ」に参加した SIM 学生 27 名（2 学年：16 名、1 学年：11 名）
方 法：参加学生に対してメールにて告知
回 収 率：80%
有効回答率：100%
質問項目：(表 3)

II. 「仙台ランチ」の活動を振り返って

省察検討会の開催

本活動の終了後、「仙台ランチ」の活動に参加した学生と SIM 学科教員とともに『「仙台ランチ」の活動に関する省察検討会』を開催した。この省察会は、学生に「仙台ランチ」の活動を通じた感想を述べてもらい、学生自身に本活動を通じた成長の過程を振り返ってもらうことをねらいとした。学生からは「これまでは少数の競技種目にしか興味が無かったが、今回の活動を通して、様々な競技に関する中継や報道に興味を持つようになった」、「スポーツに関係する多くの番組について興味を持ち、意識的に観たり、録画したりする習慣がついた」、「新聞やテレビニュースのコメントに注目して、『自分ならどのような立場をとるか』について考えるようになった」、「もっと本を読んだりすることで、知識の幅を広げていきたい」、「自分自身が『スポーツ』について『知らない』ことに気づいた。スポーツニュースは勿論、政治等のニュースにも関心を持っていきたい」等の発言がなされた。

「仙台ランチ」の活動に関する意識調査

省察検討会において、学生の感想を発表してもらったが、「仙台ランチ」の活動によって具体的に「どのような能力が向上したか」、「今後の活動に向けた課題は何か」等については明確にすることができなかったため、省察検討会の内容を補完することを目的として意識調査を実施した。アンケートの詳細は下記の通りである。

表 3. 質問項目

- | |
|---|
| <p>①本活動に参加した理由は何ですか。</p> <p>②本活動に参加してよかったと感じますか。</p> <p>③本活動に参加したことにより、良かったと感じた点は何ですか（3つ選択）。</p> <p>④本活動において、今後も重点的に活動を行わなければならないと感じた作業は何ですか（3つ選択）。</p> <p>⑥今後このような活動が行われる場合、また参加してみたいと思いますか。</p> |
|---|

考察

まず、省察検討会における発言からは、スポーツに対する「興味・関心」の高まりは勿論のこと、報道を通して得られる情報に意識を向けたり、その情報を元に自分自身の考え方をまとめるといった「スポーツ情報」を扱う高い専門性を身につけようとする積極的な学業に対する姿勢が感じられる。

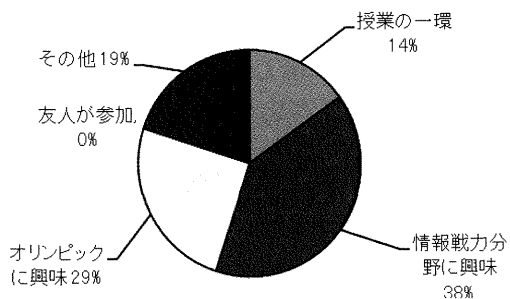
次に、アンケート調査の結果に関して、項目別にみていきたい。

- ①「仙台ランチ」の活動は先述のとおり、一部の学生は授業の一環としての参加であった。しかしながら、「情報戦略分野」に関する興味関心、あるいはオリンピックに興味がある

結果（表記の都合上、一部順不同）

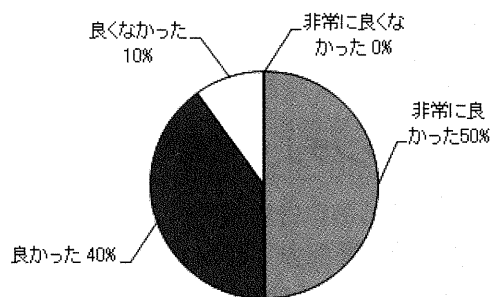
①

参加理由: 解答別割合



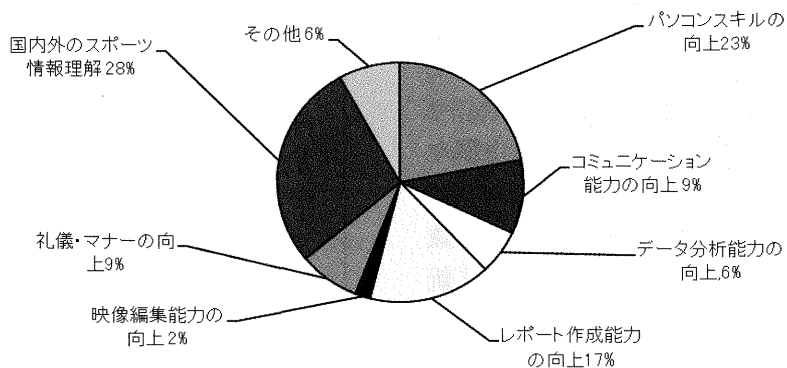
②

参加評価: 解答別割合



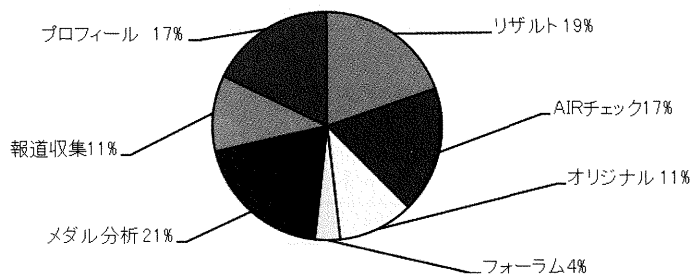
③

本活動を通して良かった点: 解答別割合



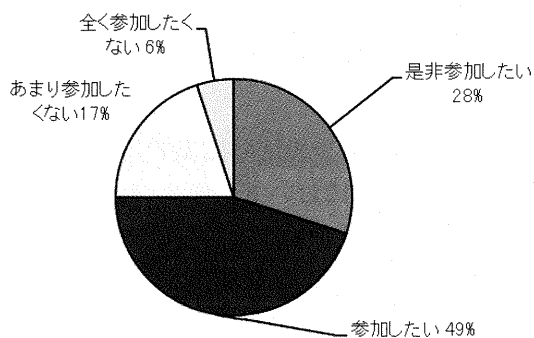
④

今後重点的に必要な作業: 解答別割合



⑤

次回参加: 解答別割合



⑤今後このような活動がある場合、どのような点を改善すれば良いと思いますか。

- ・事前の準備と詳しい説明と指導。
- ・グループ編纂を学生も含めて考えるべき。
- ・ダブルチェックの徹底。もう少し早めに本部からの通達を知りたい。
- ・もう少しまとまりのあるチームにするためにも、リーダーを中心にミーティングの中身の質を上げ、効率よくやっていけば良いと思いました。
- ・JISSと仙台ランチの温度差があったように思えたので、そこを改善すべき。仙台とJISSをもっとスカイプ（スカイプリミテッド）でつないで、ミーティングなどを一緒にやるべきではないかと思った。
- ・事前の情報収集
- ・ベースになるスキル、自分が何をを行うのかを明確にする（できる）。
- ・事前にやるのがたくさんあるのに、内容ややるのがはっきりしていない。やりたいことをやっている人は楽しかったが、やりたくないことをやっている人は楽しくないと思った。雰囲気が悪い。
- ・食事を用意してほしい。
- ・チーム内でコミュニケーションをとること。食事・食費のこと。
- ・参加する人たちで何度かミーティングする必要があると思う。
- ・完成物の例などを作業前に統一することが大事だと思う（JISSとも話し合う必要がある）。
- ・引き継ぎの面でうまくいかなかったのが、引き継ぎノートの活用法をもっと考える。
- ・東京の本部としっかり連絡とる。
- ・ダブルチェックをしっかりとやる。
- ・チーム内でしっかりと情報共有。
- ・人を増やす・時間を守る
- ・事前に連絡がほしい。お金がなくなる。雰囲気がよくない。
- ・メンバー内のコミュニケーション。健康管理。事前の下調べ。
- ・計画性をもって事前に準備を進める。
- ・機材チェックを入念に行っておく。
- ・目的・活動内容を明確にしておく。
- ・機材が本当に使えるのかどうか確認。
- ・各グループ間でのコミュニケーション
- ・今回は2階と4階での作業になったが、2つの階での情報の共有や交換が足りなかったと思うので、まずはその部分の改善をしたほうが良い。

あったという回答が多く得られ、学生の主体的な意思によって活動に参加した様子が推察される。

- ②「仙台ランチ」の活動を終えた、学生の満足度は「非常に良かった」、「良かった」の回答を合わせて90%に達した。学生それぞれが、これまでに経験したことのない活動を通して、達成感あるいは充足感を味わったようである。
- ③学生自身が、この活動を通して具体的に何を学んだこととして「パソコンスキルの向上」、「レポート作成能力の向上」、「国内外のスポーツ情報の理解」が上位項目となった。これらは、いずれも学科内の授業、あるいは「学生特別教育支援」事業において取り上げてきたことであり、それらをこの活動を通して体験的に学ぶことができたようである。
- ④今後の活動については「リザルト(競技結果)」の収集、「AIR チェック」作業、「プロフィール」作成、あるいは「報道収集」作業と「オリジナル」プロジェクトチームを含めた「地域情報収集チーム」の作業のいずれもが大差なく「必要な作業」として位置づけた方が良いという結果となった。
- ⑤回答の傾向を大きく分け、今後の改善点をあげると、東京Jプロジェクト本部あるいはメンバー間の「指示連絡系統」に関する点、機材や制作資料の構成等活動を行うための「事前準備」に関する点が多く挙げられた。先述したように、北京オリンピックにおける東京Jプロジェクトは、これまでの活動体制が一変され、非常に大規模な組織として活動することとなった。従って「どのような資料を作成すれば良いか」、「何を調べれば良いか」といった「指示」や「連絡」体制を整備することが非常に難しかった。さらにどのような事前資料や機材を整備する必要があるのかと

いった「準備」についても検討の余地があり、調査結果から得られた改善点に関する指摘は「仙台ランチ」の枠に収まらず、東京Jプロジェクト全体のさらなる「組織」としての進展にとっても非常に重要なものと考えられることができる。

- ⑥今後同様の活動があった場合「是非参加したい」、「参加したい」の回答を合わせて77%の学生が参加の意思を示した。非常に多くの困難がありながらも、再び情報戦略に関わり、学ぼうとする学生の積極的な姿勢を推察することができる。

Ⅲ. 総括

SIMの学生は今回の活動を通して、「情報戦略」という仕事を担う「本物の現場」に触れ、大きく成長した。作業を進める中でおこる様々な問題に対し、仲間と共に話し合い解決しようとするものの、時には衝突する場面もあった。その場合どのような対処をすれば良いか学生自身で話し合い、解決策を導こうと努力する学生の直向な姿勢は評価に値するものであった。しかしながらこの活動を通して、いくつかの課題が明らかとなった。それは、学生に「パソコンソフトの操作技術が不足していること」、「課題解決能力が不足していること」であった。「パソコンソフトの操作技術」に関しては「保存の方法がわからない」、「コピーの仕方がわからない」といった学生もおり、「仙台ランチ」側のスタッフは「パソコンの操作指導」に多くの時間を費やした。また「課題解決能力の不足」に関しては、学生自身が「問題」に対して「解決しよう」という「姿勢」をみせるものの、「何を参考にしたら良いのか」、「わからない情報は他のチームに聞けばわかるのではないか」といったように、「解決方法」を具体的に検討することができず、毎回「あれは行ってもいいですか」、「これは駄目でしょうか」といった質問にスタッフが対応しなければならない状況であっ

た。SIMの何人かの学生は、すでに「仙台ブランチ」の活動以外に、「競技団体」や「各競技のチーム」に赴き、テクニカル活動のサポートを行っている。今後もこのような活動は継続されることが予想されることから、「競技団体」や「各競技のチーム」のサポート現場におけるイレギュラーに発生する課題に答えることが求められる。その場合、「最低限のITリテラシー（情報関連機器活用能力）」や「発生した課題に対して具体的に検討し、最善策を求める能力」は、SIMの学生にとって必要条件となる。SIMが掲げる「スポーツ現場で生まれる情報を、分析し、加工し、発信するスペシャリストを育てる」³⁾という教育目標を考えればやはり、「学生特別教育支援」事業の一環として、「パソコンのスキルの養成」や「ディベート能力の養成」、「プレゼンテーション能力の養成」をねらいとした講習会等を、自由参加型のレギュラーの企画として設定し、学生に対して継続的なアプローチを行うことが必要であろう。

4. 文献一覧

- 1) 和久貴洋（2007）JISS - 仙台大・スポーツ情報戦略連携の可能性 JISS in Action, 国立スポーツ科学センター (http://www.jiss.naash.go.jp/column/action_54.html)
- 2) 国立スポーツ科学センター（2008）チーム「ニッポン」マルチ・サポート事業
- 3) 仙台大学スポーツ情報マスメディア研究所（2008）仙台大学スポーツ情報マスメディア学科 2008 パンフレット